

第2章

学歴・教育への期待

今回の調査対象は、21世紀の冒頭に高校卒業後の進路選択を迫られることになる子どもたちの親である。彼らは、子どもをどの段階の学校まで進学させたいと考えているのか。さらに、子どもをどんな中学校、高校、短大・大学へ通わせたいと思っているのだろうか。この章では、子どもへの学歴期待を中心に分析を行う。

なお、本章では、父母の学歴、家庭の年収を以下のように分類して分析を行う。

1. 学歴期待

Q9①

お子さんには、できればどの学校まで進学してほしいと思いますか。

「大学まで」が55%、「短大まで」が13%、「専門学校まで」11%、「高校まで」13%、「大学院まで」3%。現在の高等教育進学率をはるかに上回る。4年制大学までの学歴を期待することが多いのは、男子、東京、高学歴、年収の高い親である。

リクルート・リサーチが発表した「2008年までの高卒進路動向予測」（『カレッジマネジメント』誌第47号参照）によれば、現在およそ4割の短大・大学進学率は、西暦2000年には41%ないし44%程度に上昇することが見込まれている。このシミュレーションはさまざまな仮定のもとに行われているが、ポイントは、第一に高卒就職率を現在の水準のままに設定していること、第二に短大・大学進学志願率が毎年0.1%から0.4%ずつ上昇すると仮定していることにある。この推計によれば、18歳人口の急激な減少のために、西暦2008年には、大学・短大合格率（志願者に対する収容定員の割合）は9割をこえる実質無選抜状態が出現する。志願者からみれば、大学・短大から選抜されるのではなく、選り取りみどりの選択が可能な時代を迎えることになる。

さて、今回の調査対象は、ちょうど西暦2000

<父母の学歴>

1. 父母ともに高等教育卒
(短大、4年制大学、大学院)
2. 父母のいずれかが高等教育卒
3. 父母ともに中等教育卒

<家庭の年収>

1. 父母の年収合計額が600万円未満
2. 600万円以上～800万円未満
3. 800万円以上～1000万円未満
4. 1000万円以上

年に、高校進学や大学進学を迎える子どもたちの保護者である。彼らはどの段階までの教育を子どもに期待しているのだろうか。それは先のシミュレーションと符合するだろうか。

調査結果は、全体で、「大学まで」が55%、「短大まで」が13%、「専門学校まで」11%、「高校まで」13%、「大学院まで」3%であった。

高等教育機関である大学と短大への進学を期待する親は、合わせて7割弱に達しており、これは現在の実際の進学率約4割を大幅に上回る。またリクルートによる2000年の進学率予測をもかなり上回っている。このことは、次のことを意味する。

①大学と短大の収容定員の飛躍的な増加がないならば、合格率の上昇期、実質無選抜状態の到来はリクルート予測よりも遅くなる。すなわち、大学と短大への進学をめぐる受験競争の緩和は、少なくとも21世紀の冒頭まではそれほど期待できない。

②専門学校は、大学・短大への進学需要が充足されなかった者たちの受け皿として、生き残りが可能になる。

③高校までを期待するものが1割強であることから考えて、高卒就職率は大幅に落ち込む。

また、大学院までの進学を期待する親が、3%に達している点も注目される。

以上の結果は、子どもの性別や地域、親の

学歴などによって大きく異なる。

①男子の親は、4年制大学までを期待する者が多く、女子の親は短大あるいは専門学校までを期待する者が多い。男子の親は7割が4年制大学を期待するのに対し、女子のそれは約4割で、代わりに短大までが約25%、専門学校までが約15%である（図5）。

②地域別にも大きな差があり、4年制大学までを希望する親は、東京(64%)、岡山(60%)の順に多く、秋田・岩手では4割強にとどまる（図6）。この結果は、大都市圏と西日本で進学率が高く、東日本で相対的に低い現状を反映している。

図5 どの学校まで進んでほしいか

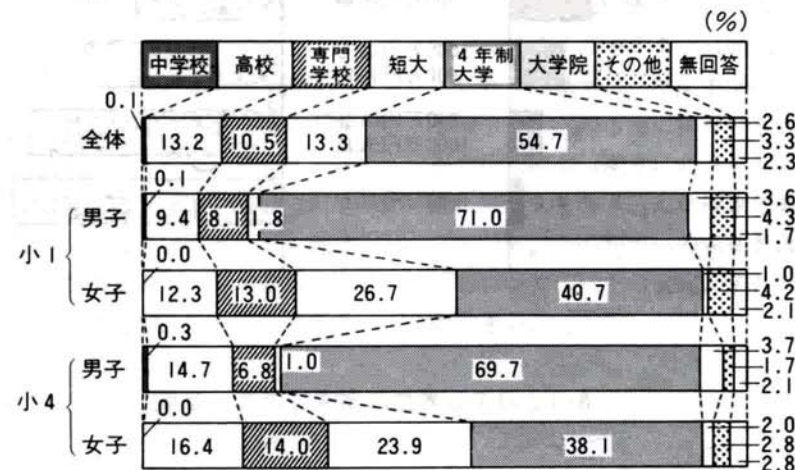


図6 どの学校まで進んでほしいか（地域別）

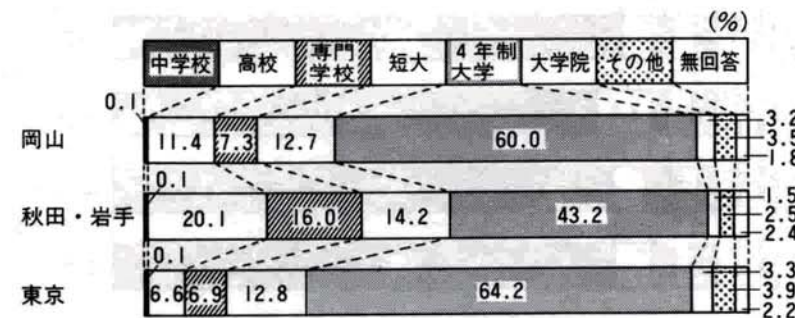
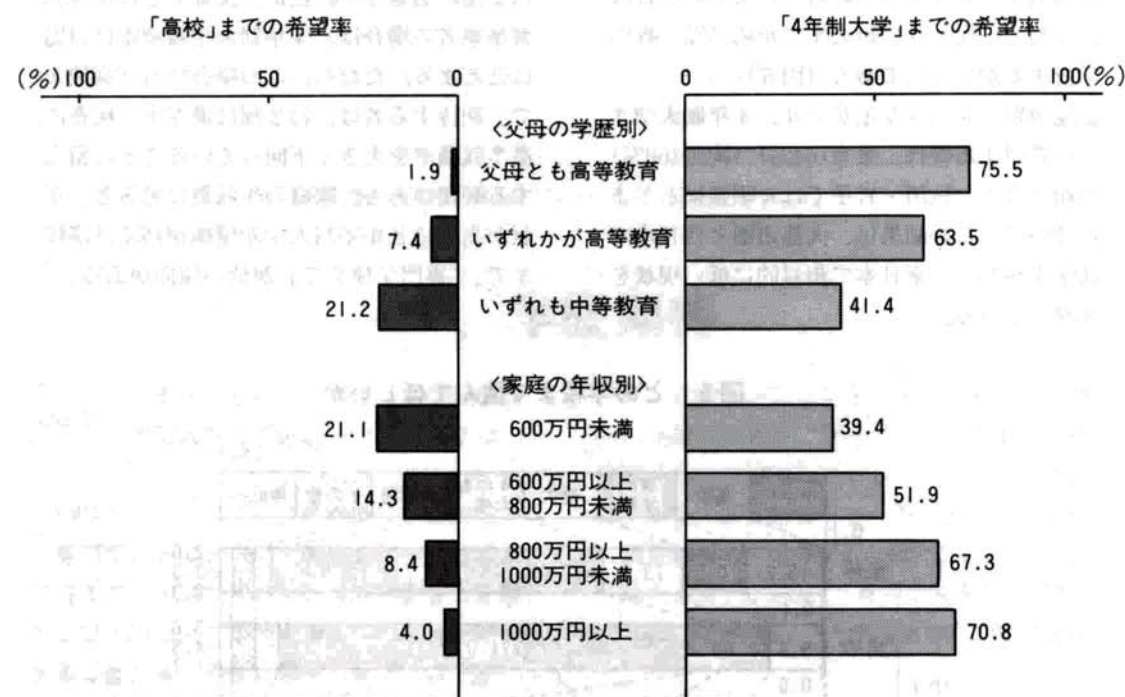


図7 どの学校まで進んでほしいか(父母の学歴別・家庭の年収別)



2. 中学校の選択

Q9②

お子さんには、どんな中学校に進学してほしいと思いますか。

公立中学83%、私立附属中学6%、それ以外の私立中学4%、国立附属中学3%。ただし東京は特異で、公立志向は63%にとどまり、私立附属中学17%、その他の私立9%が多い。高学歴、年収の高い親で、公立中学校への進学希望が小さい。

子どもに進学してほしい中学校を、「公立中学校」「私立大学や私立短大の附属中学校」「それ以外の私立の中学校」「国立大学の附属中学校」の中から選択させた。

結果は、公立中学=83%、私立附属中学=6%、それ以外の私立中学=4%、国立附属中学=3%であった。多くの親にとって、居住地附近に進学可能な私立あるいは国立の中学校が存在しない、あるいは存在しても収容枠が小さいという事情があり、大多数は公立中学校を希望している(図8)。ただし、現在

の在学率は、公立=96%、私立=4%、国立=1%(平成2年度現在)、調査対象の親たちの希望は、これよりも私立および国立志向が強いといえることができる。

属性別にみると次の傾向がある。

①地域別にみると、東京が特異な傾向を示す。東京で公立中学を希望するのは63%にとどまり、私立附属中学(17%)、私立中学(9%)が多い。ことに私立大学、短大の附属中学を希望するものが5人に1人弱に達していることは、注目されてよい(図9)。

②高学歴の親、年収の高い家庭で、公立中学を希望する者が少なく、私立附属中学、私立中学を希望する者が多い(図10、図11)。

これらの結果は、私立中学への受験をめぐる競争は、大都市圏に特有のものであること、それは大都市(東京)の子どもたちのおよそ3人に1人を巻き込んだ現象であることを示している。この競争への参加者は、高学歴層、年収1000万円以上の家庭の子どもたちが相対的に多い。

図8 どんな中学に進学してほしいか



図9 どんな中学に進学してほしいか（地域別）

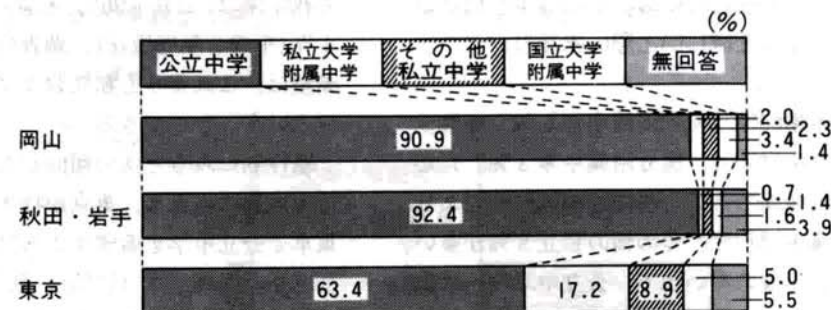


図10 どんな中学に進学してほしいか（父母の学歴別）

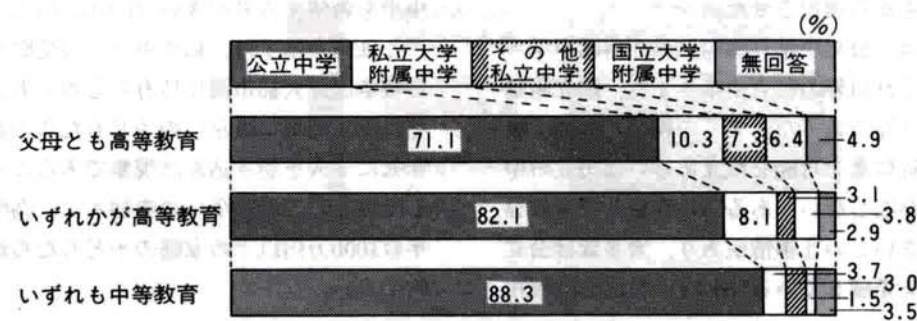


図11 どんな中学に進学してほしいか（家庭の年収別）



3. 高等学校の選択

Q9

お子さんには、どんな高校に進学してほしいと思いますか。

公立高校79%、私立大学・短大の附属高校9%、それ以外の私立高校4%。国立大学附属高校3%。ここでも地域差が目立ち、岡山、秋田・岩手では公立高校を選択する者が9割をこえているが、東京では半数を切る49%に過ぎない。

続いて、どんな高校に進学してほしいと考えているかを見てみよう。選択肢は、中学校の場合とはほぼ同様である。

全体としてみると、およそ8割が「公立高校」で群を抜いて多く、これに「私立大学や

私立短大の附属高校」(9%)、「それ以外の私立高校」(4%)、「国立大学の附属高校」(3%)が続く。

中学と同様、ここでも地域差が目立つ(図12)。岡山、秋田・岩手では公立高校を選択する者が9割をこえているが、東京では半数を切る49%に過ぎない。代わって東京で多いのは、私立附属高校(26%)、それ以外の私立高校(11%)である。両者をあわせると4割近くまでが私立高校への進学を希望していることになる。無回答が9%と多いものの、現在の公立=私立の在籍者率(国公立71%、私立29%)をやや私学に偏らせた結果となっている。なお、私立高校希望者が多いのは、やはり高学歴層と年収の高い家庭である(表13)。

図12 どんな高校に進学してほしいか

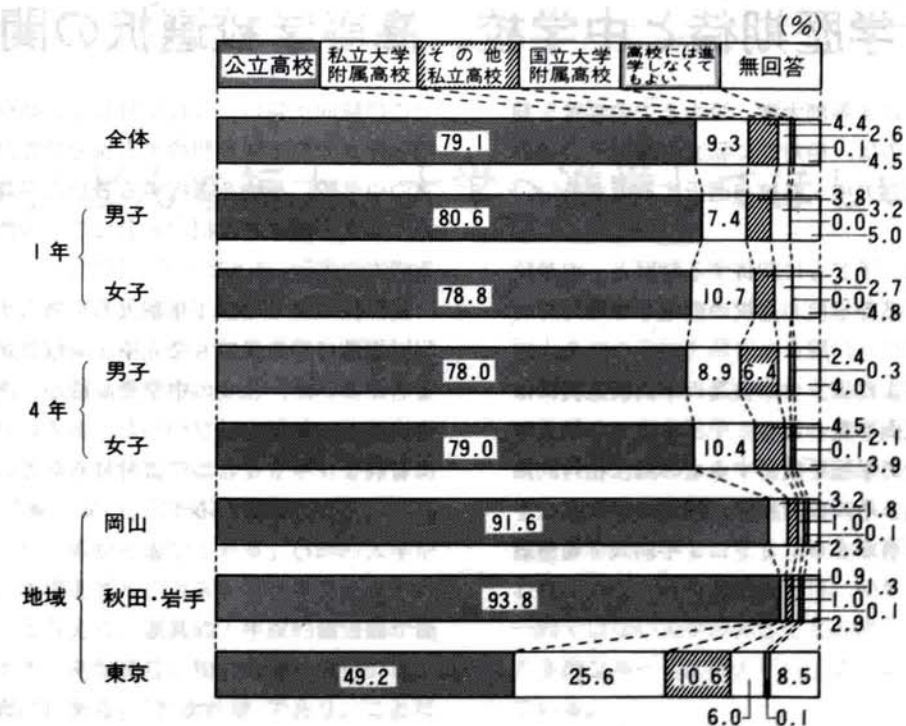


表13 どんな高校に進学してほしいか(父母の学歴別・家庭の年収別)

		(%)					
父母の学歴別	父母とも高等教育	66.7	14.3	8.1	4.0	0.0	6.9
	いずれかが高等教育	77.2	11.6	3.9	3.1	0.0	4.2
	いずれも中等教育	85.4	6.0	3.0	1.7	0.2	3.7
	無回答						
家庭の年収別	600万円未満	91.4	3.2	1.7	1.0	0.0	2.7
	600万円以上800万円未満	83.8	5.7	1.9	3.8	0.0	4.8
	800万円以上1000万円未満	85.1	8.9	3.0	2.0	0.0	1.0
	1000万円以上	61.5	20.9	8.8	2.4	0.0	6.4

4. 学歴期待と中学校、高等学校選択の関連

子どもに4年制大学、短大までの学歴を期待するものは、相対的に私立附属、その他の私立、国立の中・高校を選択する者が多い。

最後に、子どもに期待する学歴と、中学校の選択、高等学校の選択の関連を整理しておこう。

表14によれば、中学校選択と高校選択には共通の傾向が見られる。子どもに4年制大学、短大までの学歴を期待するものは、相対的に私立附属、その他の私立、国立の中・高校を選択する者が多い。とくに4年制大学希望者

でこの傾向が強い。これに対して、高校、専門学校までの学歴を期待する保護者では、公立の中学校、高校を選択する者が大多数を占め、私立、国立を選択する者はごく少数である。

絶対数の上では、4年制大学・短大までの学歴を期待する者でも公立中・高校を選択する者が多いが、私立の中学や高校が、高等教育機関への進学と結びついた、あるいはそれに有利なルートとして位置付けられているといえることができるだろう。

表14 中学校、高校の選択(学歴期待別)

		(%)			
中学校の選択	公立中学	92.4	93.3	86.3	79.2
	私立大学附属中学	0.3	1.7	8.4	8.5
	その他私立中学	3.4	2.7	1.8	4.7
	国立大学附属中学	0.5	0.0	1.1	4.6
	無回答	3.4	2.3	2.4	3.0
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0
高校の選択	公立高校	90.7	92.6	79.7	75.4
	私立大学附属高校	1.1	2.7	14.7	11.6
	その他私立高校	4.0	2.0	2.4	5.3
	国立大学附属高校	0.5	0.0	1.1	3.6
	高校には進学しなくてもよい	0.3	0.0	0.0	0.0
	無回答	3.4	2.7	2.1	4.1
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0

*子どもに進学してほしい学校段階のうち、「中学校まで」「大学院まで」「その他」は省略した。

5. どんな短大、大学へ進学してほしいか

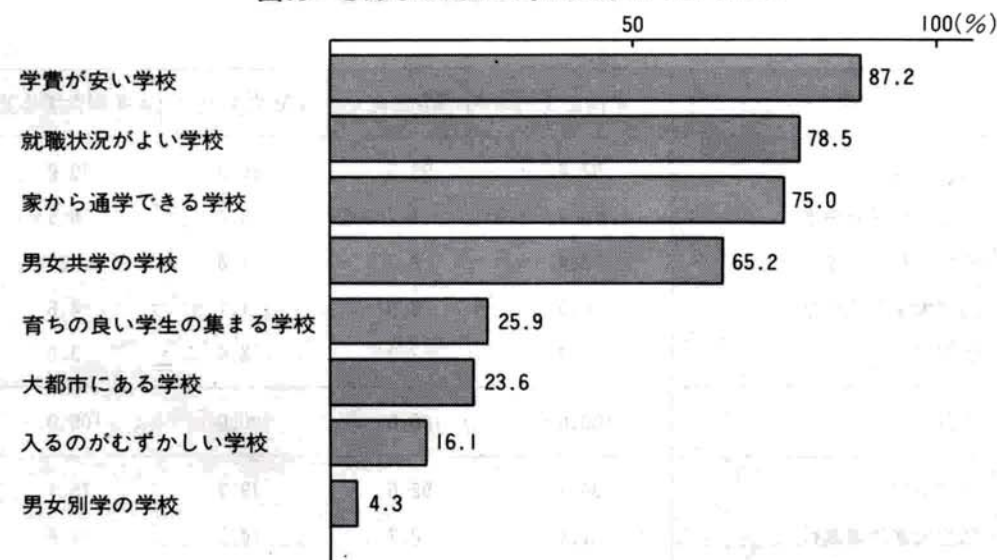
Q10 (かりにお子さんを、短大や大学に進学させるとしたら) 具体的には、どんな短大や大学に進学してほしいと思いますか。

親の多くが進学してほしいと思っているのは、「学費が安い」(87%)、「就職状況がよい」(79%)、「家から通学できる」(75%)大学や短大。大学進学を、コストとベネフィットの点からとらえる、道具的・手段的価値観が優勢である。高学歴層の親で希望が強いのは、「大都市にある」「男女共学」であり、ことに「入るのがむずかしい」(30%)と「育ちの良い学生の集まる」(37%)は、他の学歴層を大きく上回る選択率となっている。

前項で明らかにしたように、4年制大学や、短大までの学歴を期待する親は、合計すると7割弱に達した。彼らは、どんな大学、短大に子どもたちを進学させたいのだろうか。18歳人口の急減にともなう、「親、生徒が消費者として大学を選ぶ時代」の到来を予期して、現在多くの大学で、さまざまな改革努力が払われている。これらの努力は、結果として画一的ではない大学の個性を生み出し、消費者の多様なニーズに答えていくことが期待されている。

まず、学費、所在地、共学・別学など、大学・短大がもっている基本的な属性について、親がどんな大学・短大を希望しているのかを

図13 どんな短大や大学に進学してほしいか



*数字は「とてもそう思う」と「まあそう思う」と答えた人の合計

たずねた。取り上げた項目は、図13の8項目である。各項目について、「進学してほしい」と「とても思う」「まあ思う」「あまり思わない」「全然思わない」の4つの中から選択させたが、分析には前2者を合計して用いる。

8つの項目は、その選択率によって、ほぼ3つのグループに分かれる(図13)。

第一のグループは、親のおよそ3分の2以上が進学してほしいと思う大学・短大像である。数値の高い順に、「学費が安い」(87%)、「就職状況がよい」(79%)、「家から通学できる」(75%)、「男女共学」(65%)とならぶ。前三者はいずれも経済的なコストと見返りに関わる。ここから、親たちは、大学を選択するに際し、まず第一に経済的側面を重視しているといえる。大学進学を、コストとベネフィットの点からとらえる、道具的・手段的価値観が優勢なように思える。

第二のグループは、親のおよそ4分の1程度が進学してほしいと考えている大学・短大像である。「育ちの良い学生の集まる」(26%)と「大都市にある」(24%)の2項目が含まれている。

第三のグループは、「入るのがむずかしい」(16%)と「男女別学」(4%)である。いずれも選択しているのは5人に1人以下であり、

少数の親だけが進学してほしいと考える大学・短大像になっている。「入るのがむずかしい大学」は、いわゆるエリート大学を意味するが、そこへ進学してほしいと考える親は意外に少ない。

男女別学(実際には女子大、女子短大)を希望する親は、4%と8項目中もっとも少なかった。俗に女子大離れが指摘されるが、それを裏付ける結果が出ている。女子大は、別学であることを売り物にできないばかりでなく、学生募集において困難な状況を迎えることになるかもしれない。

これらは、子どもの性別、地域、学歴などによってやや異なった傾向を見せている。

①子どもの性別にみると、女子の親に相対的に多いのは、「家から通学できる」「男女別学」「育ちの良い学生の集まる」の3項目である。逆に、差は大きくないものの男子に多いのが「入るのがむずかしい」「男女共学」である。「学費が安い」「就職状況がよい」は、子どもの性別に関わらず、共通して選好されている(表15)。

②地域別にみると、各々次のような大学・短大への進学を希望する傾向がある(表16)。

東京…大都市にあり家から通学できる／入るのがむずかしい／男女別学／男女共学／育

ちの良い学生の集まる

岡山…入るのがむずかしい／家から通学できる／育ちの良い学生の集まる

秋田・岩手…就職状況がよい

東京の特徴は、いずれの属性についても選択率が高いことである。男女別学と男女共学への進学を希望する親が、いずれも相対的に多いことは、ニーズが分化していることを示している。秋田・岩手は、就職状況がよいことを除いて、いずれも選択率が低い。岡山は両者の中間である。

③学歴別にみると、高等教育学歴層と中等教育学歴層で、大学・短大の選好パターンが対照的になっている(表17)。父母ともに高等教育卒で多いのは、「大都市にある」「男女共学」

であり、ことに「入るのがむずかしい」(30%)と「育ちの良い学生の集まる」(37%)は、他の学歴階層を大きく上回る選択率となっている。高学歴層は、大都市にある共学大学を基礎的条件とし、学力の点で評価されるエリート大学であり、しかも育ちの良い学生が集まることによりハイ・カルチャーを備えた大学を志向している。「学力+文化」を基準とした大学選好が優勢であるとみてよいだろう。

これに対して、父母ともに中等教育卒の場合は、学力と文化の基準を相対的に重視せず、もっぱら経済的なコストとベネフィットを重視したものとなっている。この層で比較的选择率が高いのは、「学費が安い」と「就職状況がよい」の2項目である。

表15 どんな短大や大学に進学してほしいか(性・学年別)

	小 1		小 4	
	男子	女子	男子	女子
家から通学できる学校	70.0	81.4	70.0	78.9
大都市にある学校	25.1	23.3	25.4	20.9
学費が安い学校	88.9	87.3	87.7	85.6
就職状況がよい学校	79.8	77.7	77.9	79.0
入るのがむずかしい学校	17.4	14.4	19.7	13.0
男女共学の学校	69.2	66.1	66.3	59.4
男女別学の学校	2.9	5.6	1.8	6.6
育ちの良い学生の集まる学校	21.1	28.8	24.4	29.6

*数字は「とてもそう思う」と「まあそう思う」と答えた人の合計

表16 どんな短大や大学に進学してほしいか(地域別)

	岡 山	秋田・岩手	東 京
家から通学できる学校	78.6	60.3	89.2
大都市にある学校	12.6	13.2	47.2
学費が安い学校	89.1	88.4	84.3
就職状況がよい学校	77.9	81.9	75.2
入るのがむずかしい学校	18.1	13.2	17.9
男女共学の学校	64.2	62.5	69.6
男女別学の学校	2.7	3.0	7.1
育ちの良い学生の集まる学校	24.4	17.0	38.3

* 数字は「とてもそう思う」と「まあそう思う」と答えた人の合計

表17 どんな短大や大学に進学してほしいか(学歴別)

	父母ともに 高等教育	いずれかが 高等教育	父母ともに 中等教育
家から通学できる学校	71.8	78.1	74.9
大都市にある学校	36.0	25.9	16.9
学費が安い学校	82.8	88.8	88.5
就職状況がよい学校	73.1	77.1	81.7
入るのがむずかしい学校	30.0	15.9	9.9
男女共学の学校	76.9	62.5	61.2
男女別学の学校	3.9	4.3	4.3
育ちの良い学生の集まる学校	36.9	26.2	20.8

* 数字は「とてもそう思う」と「まあそう思う」と答えた人の合計

6. 特色ある短大、大学の選好

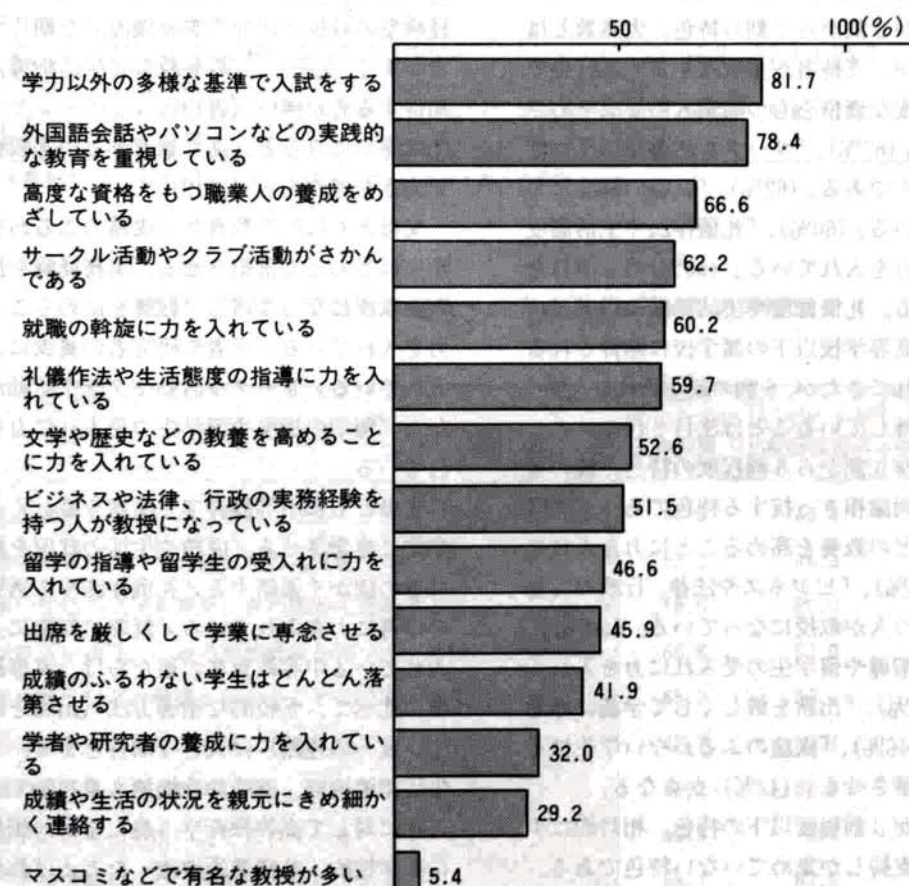
Q11

2000年になると、次のような特色をもった短大・大学がでてくると考えられます。あなたはお子さんに、それぞれのタイプの短大・大学へ、どのくらい進学してほしいと思いますか。

教養教育よりも実践的な教育、研究者養成機能よりも職業準備機能が全体として重視されており、かつ礼儀作法、生活態度の指導も期待されている。ここから浮かんでくるのは、

実践的な知識・能力・技術においても、また礼儀作法、生活態度においても、職業人として一人前にしてくれる、いわば「職業大学」の姿である。中等教育卒の親たちは、高等教育卒に比べて、学校的な指導方法（出席を厳しく、親への連絡）に大きな期待を寄せ、また生活指導機能、就職斡旋機能も重視している。これに対して高等教育卒の親たちは、相対的に非学校的、非職業的機能—たとえば教養教育、研究者養成機能—を重視している。

図14 進学してほしい短大・大学のタイプ



* 数字は「とてもそう思う」と「まあそう思う」と答えた人の合計

前項では、短大・大学の基本的な属性をあげて、それぞれへの進学希望をたずねた。次に、大学や短大の、主として教育面、指導面での特色を14あげて設問した(項目は図14を参照)。選択肢は前項と同様に4カテゴリを2カテゴリにまとめて、進学してほしいと「とても思う+まあ思う」の比率を分析の対象とした。

大学と短大の14の特色は、その選択率から次の4つに分かれる(図14)。

①選択率が8割程度の特色。大多数の親が望んでいる特色である。「学力以外の多様な基準で入試をする」(82%)と「外国語会話やパソコンなどの実践的な教育を重視している」(78%)の2項目からなる。いずれも現在すでに、大学改革の重点事項として一般に主張されている特色である。

②選択率が6割から7割の特色。大多数とはいえないが、支持者が多数派を占める特色である。「高度な資格をもつ職業人の養成をめざしている」(67%)、「サークル活動やクラブ活動がさかんである」(62%)、「就職の斡旋に力を入れている」(60%)、「礼儀作法や生活態度の指導に力を入れている」(60%)の4項目を含んでいる。礼儀態度や生活態度の指導は、主として高等学校以下の諸学校に期待される機能とされてきたが、6割の親がこれを大学・短大に期待していることは注目される。

③選択率が4割から5割程度の特色。親の希望が賛否両論相き抗する特色であり、「文学や歴史などの教養を高めることに力を入れている」(53%)、「ビジネスや法律、行政の実務経験を持つ人が教授になっている」(52%)、「留学の指導や留学生の受入れに力を入れている」(47%)、「出席を厳しくして学業に専念させる」(46%)、「成績のふるわない学生はどんどん落第させる」(42%)からなる。

④選択率が3割程度以下の特色。相対的に少数の親の支持しか集めていない特色である。「学者や研究者の養成に力を入れている」(32%)、「成績や生活の状況を親元にきめ細かく連絡する」(29%)、「マスコミなどで有名な教

授が多い」(5%)の3項目からなる。

これらを要するに、教養教育よりも実践的な教育、研究者養成機能よりも職業準備機能が全体として重視されており、かつ礼儀作法、生活態度の指導も期待されているといえる。ここから浮かんでくるのは、実践的な知識・能力・技術においても、また礼儀作法、生活態度においても、職業人として一人前にしてくれる、いわば「職業大学」の姿である。ただし、この職業人養成の手段として、「出席を厳しくして学業に専念させる」「成績のふるわない学生はどんどん落第させる」などの厳しい「学校」的指導方法をとることに對しては、親たちの意見は分かれている。

以上の結果を属性別にみると次のようになる。

①子どもの性別にみると、男子の親で/実務経験型の教授/研究者養成機能/を期待する者が多く、女子で、/教養教育/生活指導/を期待する者が多い(表18)。

②学歴別にみると、高等教育卒と中等教育卒で大きな差がある(表19)。

父母ともに高等教育卒…成績のふるわない学生はどんどん落第させる/実務経験を持つ人が教授になっている/教養を高めることに力を入れている/学者や研究者の養成に力を入れている/サークル活動やクラブ活動がさかん/留学の指導や留学生の受入れに力を入れている

父母ともに中等教育卒…出席を厳しくして学業に専念させる/成績や生活の状況を親元にきめ細かく連絡する/礼儀作法や生活態度の指導に力を入れている/就職の斡旋に力を入れている中等教育卒の親たちは、高等教育卒に比べて、学校的な指導方法(出席を厳しく、親への連絡)に大きな期待を寄せ、また生活指導機能、就職斡旋機能も重視している。これに對して高等教育卒の親たちは、相対的に非学校的、非職業的機能—たとえば教養教育、研究者養成機能—を重視しているといえる。

前項での結果を含めて考えると、親の学歴

によって選好する大学・短大の特色には大きな差異がある。長期的にみるならば、18歳人口の減少にともない親や高校生が大学・短大を選択し得る余地は徐々に大きくなる。これに呼応して、大学や短大は売り物とする特色

を異にする、さまざまなタイプへと分化していくだろう。学歴による選好の相違を考慮すると、大学や短大の特色の分化は、そこに在学する社会層(学歴階層)の分化をとともなうことになるかもしれない。

表18 進学してほしい短大・大学のタイプ(性別・学年別)

	(%)			
	小 1		小 4	
	男子	女子	男子	女子
ビジネスや法律、行政の実務経験を持つ人が教授になっている	55.3	49.2	54.4	46.9
文学や歴史などの教養を高めることに力を入れている	51.0	55.9	48.4	55.2
礼儀作法や生活態度の指導に力を入れている	57.0	65.1	53.3	63.7
学者や研究者の養成に力を入れている	34.7	29.8	34.1	29.3

*数字は「とてもそう思う」と「まあそう思う」と答えた人の合計

表19 進学してほしい短大・大学のタイプ(父母の学歴別)

	(%)		
	父母ともに高等教育	いずれかが高等教育	父母ともに中等教育
出席を厳しくして学業に専念させる	41.0	46.4	47.8
成績のふるわない学生はどんどん落第させる	53.9	48.3	33.2
成績や生活の状況を親元にきめ細かく連絡する	18.5	28.0	34.6
ビジネスや法律、行政の実務経験を持つ人が教授になっている	56.6	53.0	48.2
文学や歴史などの教養を高めることに力を入れている	65.2	53.1	46.5
礼儀作法や生活態度の指導に力を入れている	42.7	59.4	67.5
就職の斡旋に力を入れている	55.2	58.9	63.0
学者や研究者の養成に力を入れている	45.5	36.4	23.6
サークル活動やクラブ活動がさかんである	68.1	63.5	58.8
留学の指導や留学生の受入れに力を入れている	59.3	49.4	39.4

*数字は「とてもそう思う」と「まあそう思う」と答えた人の合計